

『International Cross-Cultural Art and Design Workshops』

@ Polish Japanese Academy of IT

期間:2023年5月14日(日)~2023年5月22日(月)

引率者:楠房子(情報デザイン学科教授)・古谷博子(油画学科版画専攻教授)

派遣者:徳野稀太・ダイイコウ(情報デザイン学科)

PJAIT(担当教員): 総合ディレクター;Jakub Karpoluk、担当教員;Jan Piechota

ワークショップの概要

ポーランド日本情報技術アカデミーは、1994年にポーランド共和国と日本政府の協定に基づき設立された。ポーランドの発展にとって重要なコンピュータ技術応用の実践的分野で、創造的かつ献身的に活動できるスペシャリストの質の高い教育を行うことが、PJAITのさらなる発展のための優先事項であり、現在も続いている。

PJAITは、コンピュータサイエンス、情報管理、グラフィックデザイン、マルチメディアアート、グラフィックデザイン、インテリアデザイン、文化研究の分野で学部がある。

「国際異文化交流アート&デザインワークショップ」は、4年間行われてきた。今年も2023年5月15日~19日に、ポーランド日本ITアカデミー(以下PJAIT)のニューメディアアート学部にて開催された。PJAITの国際異文化交流アート&デザインワークショップは、ビジュアルコミュニケーション、デザイン、ニューテクノロジー、ファインアートに特化している。異文化ワークショップ・ウィークは、教授と学生の積極的な交流を促進し、将来、学生が日常生活や将来のキャリアで発生する異文化との関わりを促進することを目的としている。PJAITでは、学生が市民社会への責任ある参加に必要なスキル、知識、気質を身につけるためには、グローバル教育の統合が不可欠であり、ファインアートとデザイン、IT技術、リベラルアーツを融合させる大学目標がある。そこで異文化ワークショップ・ウィークは、教授と学生の積極的な交流を促進し、将来、学生が日常生活や将来のキャリアで発生する異文化との関わりを促進することを目的として開催している。2021・2022年はコロナ禍のためオンライン開催となった。楠は、2021年~参加しており、昨年度も基調講演とオンラインでワークショップを行った。今年度は、情報デザイン学科情報デザインコースの演習(知識と表現)課題を一部変更したものをワークショップ課題とした。

版画の古谷教授は「多色木版画を制作し、版による多彩な表現を学ぶ」という課題で、ワークショップを行った。日本の多色摺り木版である「浮世絵」は、ドガ、マネやゴッホなどの印象派の画家達に衝撃を与えたことはポーランドでも広く知られている。木版画は凸版における代表的な版種で、木を版材として彫刻刀で彫るなどして版面に凸凹を作って「版」を制作し、凸部に絵の具をのせ、バレンやプレス機で圧力をかけることで絵の具を版から紙に写し取る技法である。版木は自然の木、植物が原料の和紙、水性絵の具と全て自然物が材料となっていることも特徴の一つである。

対象活動 (日程含む)	05/14 日本出国 ポーランド国 ワルシャワ到着
	05/15 大学にて準備
	05/16 ワークショップ 1;(全体説明とガイダンス)
	05/17 ワークショップ 2;企画書作成とミュージアムの取材
	05/18 ワークショップ 3;制作 イラストコンテンツ制作
	05/19 全体講評会;各自の作品の発表。制作の振り返り
	05/20 帰国
	05/21 教員日本帰国,学生 2 名は 22日に日本帰国

ワークショップの日程(詳細)

5月14日(日):ポーランドワルシャワ市到着、早速大学にてワークショップ準備を行った。ホテルから大学までは、10分程度であり、キャンパスが近くのビルに点在している。

5月15日(月):A M オープニングは、本館のホールで行った。全体会は、学部長の挨拶、各教員の挨拶、開催場所の案内と日程確認であった。ワークショップは、全部で4つ開催された。ファイブ系では、版画(木版)ワークショップ、日本の屏風&掛け軸作成ワークショップ、アニメーションワークショップである。参加する学生は、主に1,2年生で別れて各ワークショップの教室に向かった。情報デザイン学科の楠の担当のワークショップは、ニューメディア棟の2階で実施となった。教室は、P C ルームで各自1台のP C が割り当てられている。PJAITの学生さんは20名であり、グループで制作するか個人で制作するかは自由とした。最初に多摩美のメンバーの自己紹介を行い、楠がワークショップの進め方のガイダンスを行った。テーマは「自分が一番気に入っているミュージアムを人にどう伝えるか」である。それを5枚のスライドで表現する。そしてARを用いてインタラクティブに表現する手法を入れるという内容である。午後から早速演習に入った。

5月16日(火曜):テーマのミュージアムの設定について話あった。また資料の調査収集を行った。1度必ず行ったことがあるミュージアムという設定とした。

5月17日(水曜)ARの説明と指導を行った。残念ながらunityをインストールすることが、管理上できなかったため、簡単なARを作成する方法で行うことにした。

経験者もいるがARが始めての学生もおおり、習熟度が異なるので個別の対応が重要であった。プレゼンしたいポイントを決めることができ全員が企画書を作成した。また大学は、ワルシャワ市の中心に位置しているため、早速ミュージアム取材に出るグループもあった。各グループは国ごとにグループとなっており、ポーランド以外にもウクライナ、オランダなど周辺の国から留学している学生が多かった。

5月18日(木):各グループで制作を行い、完成に近づけるようデザインや、ARの精度をあげるべく検討を行った。ポーランドの学生たちには、多摩美の学生とともにグループごとに検討とアドバイスをを行った。多摩美から持参したiPadは、検証や撮影に役立った。完成した作品は、ヤン先生が集めて1つのプレゼン資料にまとめた。資料を添付する。

5月19日(金曜):全体講評会は午後から行われた。午前、徳野、ダイ2名と楠とで、ヤン先生にすすめられた、2つの博物館を訪問した。最初に「ワルシャワ蜂起博物館」を訪問した。第2次世界大戦下のワルシャワの運命を決定づけた重要な出来事を知ることができる壮大な博物館である。ポーランドで最も来館者数の多い博物館のひとつであるといわれている。ワルシャワ蜂起の発端から最終的な鎮圧まで、膨大な展示品がこの悲劇的な出来事について物語っている。ナチス占領下のワルシャワ市民の生活や、そして国内軍が圧倒的に不利な状況にも関わらず、戦い続けたのかを知ることができる。発電所の跡地に建設されたこの博物館は、インタラクティブ展示を多数採用している。ラジオ局や連合軍の戦闘機の模型を見たり、戦闘中の輸送路と避難路として利用された市内の下水道の模型を這うように進んでみたり、といった体験ができる。また、当時の写真や生活用品なども展示されている。

次に「ポーランドユダヤ人の歴史博物館」を訪問した。この博物館は、ポーランド人とユダヤ人の1000年の歴史を展覧会や教育活動を通して紹介する博物館である。外壁を覆うガラスのルーバーにはラテン語とヘブライ語で Polin という言葉が書かれている。エントランスからメインホールにかけて波打つ高い壁はポーランドとユダヤ人の歴史の亀裂を象徴するものと説明があった。第二次世界大戦でナチスドイツ軍の侵略を受けたホロコースト時代の展示は日本人でも胸が詰まるものがあった。過去の歴史から学ばなければいけないことは何かということを教えてくれる博物館である。

午後2時から、他のワークショップの発表と一緒に本グループも順番に発表した。

プレゼンは、Yan先生が担当した。実際にARを用いているところを撮影して10分程度でビデオを用いてのプレゼン内容である。各グループとも博物館の一番勧めたい場所の特色が出ていて、ARを用いて表現する内容が明確であった。またプレゼンも大変趣向を凝らしており日本の学生のプレゼンとは、違った良さを感じられた。他のグループも成果を発表し、多摩美の版画の古谷教授が、木版画の解説を行い、作品の解説も行った。作品は、機材到着が遅れたのにもかかわらず、大変良い仕上がりとなった。立教大学の南雲准教授のワークショップでは、各自が制作した掛け軸と屏風をもって展示発表を行った。

1週間という短い期間の中で行うワークショップであったが、ポーランドの学生と多摩美の2名の大学院生との交流は大変有意義なものとなった。大学内でのアートやデザイン分野の先生方によるプレゼンもまた今後の研究に大変役立つ内容であった。多摩美の大学院生も、さまざまな国から来ている学生との交流は今後の制作の展開に役立つことが明確になった。来年度もワークショップが開催されれば是非再度参加し交流を深めたい。また、学生の受け入れから、教室でのサポート、エクスカージョンなど、さまざまに手厚く対応していただいた PJAIT 総合ディレクターの Jakub 先生、担当教員の Yan 先生にも深く感謝する。

2023/6/13 楠房子



図 1 大学正門前、記念撮影



図 2 大学概観



図 3 ワークショップの様子



図 4 制作中の様子



図 5 発表の様子 (1)



図 6 発表の様子 (2)



図 7 他のワークショップの発表



図 8 Yan 先生、Jakub 先生と記念撮影

